

ISSN 0910-2396

# 野鳥だより

—北海道—

北海道野鳥だより第141号

編集・発行 北海道野鳥愛護会

発行年月日 平成17年9月21日

クイナ



2004. 7. 31 西岡水源池

撮影者 小堀 煌 治 (札幌市南区)



も く じ

野幌森林公園大沢の池にアカガシラサギ	広 報 部	2
北の涯から 鳥だより 稚内市 正田 英子		3
[ 閑話 ] 野鳥あれこれ		
「長い名前、短い名前」		4
オーストラリア探鳥雑記		
札幌市西区 蒲澤鉄太郎		5
童謡の中の鳥・二題		
札幌市中央区 武沢 和義		7
鳥好きの文学散歩 6 石川啄木『一握の砂』から		
札幌市西区 高橋 良直		8
野鳥とインフルエンザウイルス		
北海道医療大学薬学部免疫微生物学講座		
教授 岡崎 克則		9
— 新聞情報から —		
天売島でコウテンシ国内初確認	広 報 部	10
探鳥会ほうこく		11
探鳥会あんない		16
鳥 民 だ よ り		16

## 野幌森林公園大沢の池にアカガシラサギ

会員の香川稔さん（札幌市厚別区）から、愛護会の主要な探鳥地である野幌森林公園の大沢の池で撮影されたアカガシラサギの写真が送られてきました。以下は香川さんのお話です。

今年（2005年）5月29日、フクロウを見たいと思って午前6時半に野幌森林公園に行き、何ヶ所かのポイントを回ったが、残念ながら姿は見られなかった。それではカワセミでもと思って9時頃に大沢の池に行ってみたところ、岸から50m近く離れたところに今までに見たことがないような鳥が降りていた。初めは猛禽かなと思ったが、頭から体上部は赤味がかかった褐色、嘴が長く黄色で、先端が黒かった。全体の形はゴイサギに似ていた。かなり遠いけれどもともかくも写真をとる思い何枚か写したところで、その鳥は飛び立ち、奥の木の枝にとまった。飛んだ時の翼全体の白さがとても印象的だった。



アカガシラサギ 2005年5月29日 野幌森林公園

その後は枝にとまったままほとんど動かなくなったので観察をいったん止め、公園内の他の鳥を見て回った。30分ぐらいたってから、どうなったかなと思って戻ってきた時には、その場所にはもういなかった。

その時には何という鳥かわからなかったけれども、家に帰ってから図鑑をいろいろと見てみると、アカガシラサギにもっとも近かった。写真店に現像に出すのが遅くなり、写真は1週間後になってしまった。なるほど、写真には猛禽みたいスタイルで写っていたが、やっぱりアカガシラサギに間違いないと思った。野鳥の識別に詳しい他の人にも見てもらったところ同じ結論だった。

北海道では珍しい鳥に、思いがけなく野幌で出会えたことはとても幸運だった。

アカガシラサギはゴイサギよりも小さい小型のサギです。中国やモンゴルで繁殖し、冬はもっと南のマレー半島やボルネオ島に移動します。日本には渡りの時期に少数が渡来し、秋田と熊本での繁殖例もあります。北海道では今回の野幌より少し前の5月23日に厚沢部町（檜山支庁管内）に飛来しましたが（北海道新聞地方版2005年6月7日）、それまでの標津町（1978年6月、1985年6月）、天売島（1993年5月）、函館市（1994年11月）などの記録を合わせても10例に満たないものと思われます。

掲載写真は白黒なので頭部や嘴の色模様が不明瞭ですが、元のカラー写真ではアカガシラサギの特徴がはっきりと認められます。愛護会の本拠地である野幌森林公園ではもとより、江別・札幌方面では初めての記録です。

文責 広 報 部

# 北の涯から 鳥だより

稚内市 疋田 英子

私は日本最北の地、稚内市に住んでおります。北の果てだからと言っても野鳥に関しては特殊なこともあまりないような気がします、何かを紹介しなければなりませんね。困りましたね。

それでは、ウオッチング好きの皆さんに変なおバサン(私)の1年間でも紹介いたしましょう。「そんなの興味ないよ」なんて言わないで、最後までこの珍鳥をウオッチングしてみてください。

## 冬の港と海岸には…

先ず、冬1月には11月末に渡って来たコオリガモを始め、海ガモを観るため港に通います。コオリガモ、クロガモ、シノリガモ、ウミアイサ…、いつものメンバーに今日はケイマフリ、ウミガラスも。ついでに写真も撮ります。



コオリガモ 2004年12月15日 稚内港

そのあと、これからどうしようかなあ～(思案)。どうも今日は利尻山も姿を現していないような天気です。じゃあ国道238号線を車を走らせ、宗谷岬まで行ってみよう!(こんなことでコースは決まります)。

あらあら、いきなりオオワシが電柱に!「電柱でござる」これも撮ろう。岬に到着するまでに、オオワシ、オジロワシのカウントもします。海獣類の漂着死骸などがあれば20羽以上ものワシたちやカラス、カモメ類が群れているときもあります。死骸は、クジラ、トド、アザラシ、イルカ、オットセイなどで、北の海で越冬するもの、迷い込んできたもの、様々です。久々の死骸をめぐり熾烈な餌争いを繰り広げているさまをパチリ! これも撮ります。

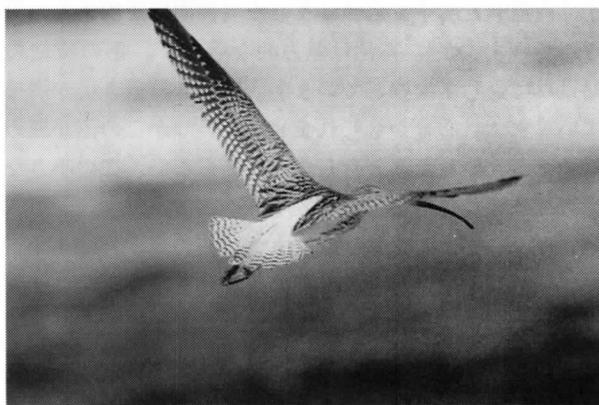
宗谷岬ようやく着きました。岬から弁天島をスコープで覗いて見ます。来てます、来てます。トドが100頭あまり! 遠いのでデジカメ+スコープでこれも撮ります。西海岸のコースも大体似たようなものですが、こちらは抜海

港のゴマフアザラシ300頭。晴れていれば利尻富士付きです。利尻富士には異常に反応してしまう疋田です。

## 渡り鳥を観る

こんなことしているうちに、3月に入ると宗谷岬からのワシの渡りが始まります。これも見送らなければなりません。風の強さや向き、晴れ具合によって、今日は渡るかどうかが決まるようです。繁殖地サハリン方面を目指して1日に数百羽も渡る様はまさに勇壮です。それは5月上旬まで延々と…。各地で越冬していたワシやタカが宗谷岬に集結します。その数はカウントのしようもないぐらいです。

今、宗谷丘陵に57基の風車が建設中です。この国内最大級のワシタカの渡りの拠点に、国内最大級の風車群がどのような影響を及ぼすことになるのか、これも大きな心配のひとつです。少しでもリスクを少なくする建設法を考えて欲しいと切に願う疋田です。



ダイシャクシギ 2005年5月11日 声問海岸

「ん?」ワシばかりを見送っている場合じゃないことにふと気づきます。3月末にはもうヒシクイの先発隊が天塩町振老に来る頃です。今年は3月27日、亜種ヒシクイ1羽、亜種オオヒシクイの2羽が仲良く?先発でした。

5月上旬になるとワシもヒシクイも行ってしまう、此処で一息つくところですが、声問海岸のシギ・チドリも行って見なければなりません。5月2日、突然!携帯電話で「疋田さ～ん、下沼にハクガン3羽がマガン1,600羽に混じっているよ～来ないの～」と情報が…。「え、下沼に?もう渡って行ってしまったかと思ったわ～。でも今ダイシャクシギとハウロクシギの2ショットを撮ってんの～」と言ったら「おおっ～そっちの方がいいな、そっちに行くよ～」と言う仲間との情報交換も…。メ(締め)はミヤコドリで私の5月は終わりました。



ミヤコドリ 2005年5月31日 声間海岸

### 芦沼物語

ここで大きな溜息が…「あ～もうみんな行っちゃったあ～、つまらないなあ～」「ん？」すぐにそんなことを言っている場合じゃないことにまた気づきます。芦沼（稚内市ルエランにある小さな沼）はどうなっているだろう…。150m×100mぐらいの小さな沼に毎年カイツブリが3つがいも営巣しています。マガモのヒナたちもスイスイと親の後ろをついて可愛い姿を見せてくれています。オオバンもバンも毎年やって来るこの沼には本当は名前がありません。フィールドノートにメモるとき名前がないと不都合なので、私が「芦沼」と勝手に名づけました（仲間は正田さんの沼と呼んでいます）。芦沼は魅力的な沼です。冬の凍結の時期以外は通して観察しています。工事資材置き場が隣接しています。私有地かもしれません。いつかこの沼が埋められることになったらどうしよう？名もない、この小さな沼を必死で守りたい正田です。

サロベツ原野の花も気になります。右の耳からはオオジギ、左の耳からはシマアオジの声を聴きながら、ワタスゲが揺れる木道をまわります。今年はシマアオジを4羽（2つがい？）確認しました。やはり毎年此処だけは来て

くれる…安堵の歩となる正田です。

### これからのこと…

9月になると幌延町下沼にやってくる7,000羽のヒシクイ（11月中旬まで）、10月になると越冬のため繁殖地からやってくるワシたち。11月にはコオリガモが、ア、アオナ、ア、アオナ。これらも「おお～よく来たね～！」と出迎えないければなりません。

はい！これでオバサンの1年はめでたく終わります。忙しい人なのか？ヒマな人なのかかわからないオバサンの職業



芦沼 遠景に利尻富士

は、申し遅れました「ベテラン主婦」なのです（年数だけです）。その主婦業の合間合間に鳥見…、いや、鳥見の合間合間に主婦（も）やっています。

下手な俳句も毎月作っています。山を見たら衝動的に？登ってしまいます。この元気な変なオバサンをウオッチングしてみたい方は、恐れずに勇気を出して、HP「北の涯から」<ネイチャー発信>

(<http://homepage3.nifty.com/kitahatc/>) を覗いて見て下さい。

## 【閑話】 野鳥あれこれ

### 「長い名前、短い名前」

一番短い鳥の種名は何でしょう。『ハイ、「ウ」です』、残念でした。「ウ」というのはウミウやカワウの総称で、「ウ」という名前そのものの鳥はいません。種名が二文字のものには、たとえばトビがいます。日本には多分10種います。中には今や野生にはいなくなってしまうものも含まれますが、指折り数えてみるのも一興です。

長い名前はというと、ハグロシロハラミズナギドリのように13字になるものがあります、でも、これは日本で記録のある鳥ということ。世界中の鳥をみたならば、もっと長い名前のものがあります。9,000種を越える鳥の全部に日本語の名前が付けられているのですが、最も長

いのはおそらく「プエルトリコヒメエメラルドハチドリ」と「フェルナンデスベニイタダキハチドリ」の17字でしょう。もしかしてプエルトリコ探鳥旅行なんていうのがあって、こんな鳥に会ったら、ノートに記録するだけでも面倒ですね。

プエルトリコヒメエメラルドハチドリはもちろんハチドリの仲間ですが、その英語名はPuerto Rican Emeraldです。Emeraldという語にはそもそも「小さいきらきらした緑色のハチドリ」という意味もあります。ハチドリ類だけで330種ぐらいいます。それぞれにふさわしい日本語名をつけた先人の苦勞がしのばれます。（広報部）

# オーストラリア探鳥雑記

札幌市西区 蒲澤 鉄太郎

## オーストラリアトップエンドの概況

2004年も新しい感動を求めて10月6日から11日まで5泊6日でオーストラリアに鳥を見に行きに来ました。今回の参加者は総勢13名と聞いていましたが、千歳空港に行ってみますと写真家のHさん・Iさん・花に詳しいTさん等12名が集合、1名は東京からの参加となりました。

オーストラリアの探鳥会は、2002年に西海岸のパス、2003年と2004年は2回続けてオーストラリアのトップエンドと言われるダーウィンのカカドゥ国立公園でした。ダーウィンは地図で見ると、日本から一番近くの国際空港で、オーストラリアとして北の端です。人口は10万人位で近代的な街です。

街は樹木が多く、家の周りは椰子の木等の緑に囲まれています。住まいも広く、郊外の住宅はプール付きが多く、大変うらやましくなりました。

オーストラリアの季節は、日本とちょうど逆で、行った時は春でした。最初の乗り替え地のブリスベン日本の5月の初め頃の気候で、ブルーのジャカラントの花が満開で、日本の桜のように春一番に咲いてとてもきれいでした。

北のダーウィンは亜熱帯に属し、日中は30度を越します。カカドゥ国立公園内は40度近くになり、最後の日は42度を超えておりました。ただ湿度が低いので木陰ではさわやかでした。

また5月から10月末までは乾季で雨が降らず、大地はからからに乾いており、あちらこちらで自然発火し、野火となって燃えておりました。この時期、鳥たちは水を求めて残り少ない湿原の水辺周辺に集まります。カカドゥ国立公園はオーストラリアとしては湿原が多くあり、探鳥には大変都合がよい場所です。とは言っても世界遺産に指定されたオーストラリア最大の国立公園で、日本の四国と同じぐらいの広さですから、湿原から次の湿原までの移動は車で時速100km以上（郊外では速度無制限の表示あり）のスピードで2～3時間は当たり前で、日本の公園のイメージとは大分違います。公園の入り口も看板だけで、入り口から30分ぐらいのところに事務所があり、入園許可書の交付を受けます。この入園許可書は、公園内で公園管理官から提示を求められることがあるとのことでした。

## 1日目

成田をカンタス航空で深夜出発し、一路南下、約8時間の飛行でオーストラリア第3の都市ブリスベンに朝7時頃

到着しました。観光客や高校生の修学旅行でさすがのジャンボ機も満席でしたが、ブリスベンに到着したほとんどの乗客は東海岸の南のシドニーやメルボルンの方に行き、ブリスベンから北に行く日本人は我々だけでした。

我々は、国内線に乗り換え、北東に向け、約4時間の飛行で午後3時頃カカドゥ国立公園のあるダーウィン空港に到着しました。機内から見る大地は、市街地も見えずあまり変化のない赤い大地のみで、やはりオーストラリアの広さを実感しました。

## 2日目

午後3時ころダーウィン空港に到着すると早速迎いのバスで最初の探鳥地である国立公園内のフォッグダム自然保護区に約1時間(100km)かけて出かけました。ここは雨季になると一面湖になるとのことで車が通行できなくなりますが、その時は、乾季のためもう少しの間大丈夫とのことでした。

車を降りて1年ぶりの風景に感激する間もなく、モリショウビン、トサカレンカク、優雅なオーストラリアツルに感激、また前年にカカドゥのホテル近くの公園で長時間追跡したベニスズメが近くの枝で群れをなして飛び交い、そのかわいらしい姿を全員で観察することができました。フォッグダム自然保護区では34種の鳥を観察できました。

いつもの事ながらなかなか現場を離れたい事でしたが、ガイドに促されてしぶしぶホテルへと向かいました。

約1時間(100km)掛けてさらに奥のその夜の宿泊地、前年と同じオーロラ・カカドゥ・サウス・アリゲーターに到着、冷房の効いた2人用のコテージで早速シャワーを浴び、昼間の汗を流し、ホテルのレストランで食事となりま



昼食後の憩いを楽しむ

した。その夜ディナーの、メインがバラマンティという淡水の白身の魚(大きいものになると2mぐらいとか)を油で揚げたもので付き合わせがポテトフライでした。バラマンティの身は白でオーストラリア内陸部では多く食べられています。ほかにパンとデザートでした。量が多く女性はもて余し気味でした。オーストラリアはビールが大変おいしくジョッキ1杯が5オーストラリアドル前後、日本円では400円程度でした。

### 3 日目

まだ薄暗いうちに鳥のかん高い声に目を覚まし、早速外に出て見ると近くの枝にアカオクロオオハムが10羽ほど鳴いていました。コテージの周辺を1時間ほど見て回りましたが、オーストラリアトキヤソデグロバトが目の前に現れたりして、自然環境の豊かさに感動しました。

この日の予定は、午前中にマムカラ湿原です。途中林の中には蟻塚が白い墓標のように沢山あって、中には3mぐらいのものもあり、この暑い中で、蟻の生命力には驚かされました。



岸辺で昼寝を楽しんでいるワニ

マムカラ湿原には観察小屋や駐車場、トイレが整備されています。観察小屋には地元の先客が早々と来ており知名度の高い湿原のようです。午前中湿原や付近を観察し、キバタン等のインコの仲間、メガネコウライウグイス、ムギワラトキ、カササギガン、アカハラモズヒタキ等39種類を観察できました。ここでも40度の暑さで、バスの運転手が用意してくれた麦茶が何よりのご馳走でした。午後2時半頃この日の宿泊地クーイングに到着、ホテルのコテージは沢山あり、車で各地からキャンプや釣りを楽しむ人が遊びに来ていました。コテージで休憩後、待望のイエローウォータークルーズに出かけました。イエローウォーターは大湿原の中を流れる川です。

この地域一帯は野鳥の聖域として知られ、280種の野鳥が観察されているといわれています。これはオーストラリア全土で見られる鳥の34%を占めるそうです。また川は魚も豊富なようでボートで釣りを楽しめます。ここを訪れる

ほとんどの釣り人は、大物のバラマンティを目指しているとのことです。ワニもたくさんおり、もちろん水泳禁止です。

ボートの乗船場はホテルからバスで5分ぐらいのところで、駐車場には各地からのバスが数台おり、ほかにホテルからもピストン輸送してました。30~40人乗りのクルーズボートが3~4隻で2時間30分の乗船で野鳥の観察、写真撮影を堪能します。我々は午後4時30分のボートに乗りましたが、乗船後直ぐ岸辺でシロハラウミワシをつがいで見つけました。ちょうど獲物を食しており、頭上から腹面にかけて真白な美しい姿に感動しました。また途中の木々に鳥が留まっているとボートを止めてくれて、じっくり観察することができました。日暮れ近くにカササギガンの大群が赤くそまった空をねぐらに帰る様子は壮観でした。2時間30分はあっという間に終わり、明朝の再度のクルーズを楽しみに帰路につきました。

### 4 日目

早朝のイエローウォータークルーズ探鳥をするため、朝6時30分にバス乗り場集まりました。すでにメンバーが駐車場近くで思い思いに鳥を見てました。朝は鳥たちが活発に活動するため、船上での観察も右左と大忙しで大変でした。一番の収穫はカワセミの仲間で一番小さいヒメミツユビカワセミを観察できたことでした。イエローウォータークルーズでの観察総数68種でした。

途中昼食をとり、2時間半かけて次の観察地であるリーニングトゥリーラングーン自然保護区で探鳥。ここは小さい沼ですが水鳥がたくさん集まり、また観察ポイントが良く、人気の場所です。優雅な姿のコウノトリ科のセイタカコウ(ジャビル)3羽を身近で見ると感動しました。その後ダーウィンへ戻り、イーストポイント公園サンセットを楽しみました。この海岸に太平洋戦争の傷跡があり驚きました。日本海軍の潜水艦が漂流し打ち上げられたとのことです。近くに戦争博物館がありましたが時間が無く見られませんでした。

### 5 日目

探鳥最終日。ホテルチェックアウトまで近くの公園で探鳥をし、前回観察出来なかったカノコスズメを見て感動しました。探鳥を終えて、シャワーを浴び、11時30分ダーウィン空港に向かい13時45分発の飛行機でブリスベンへ飛び立ちました。ブリスベンに宿泊。

### 6 日目

9時00分、ブリスベン空港を立ちオーストラリアを後にしました。今回の探鳥会で確認できたのは111種でした。

## 童謡の中の鳥・二題

札幌市中央区 武沢和義

野口雨情作詞の童謡に、「七つの子」というのがある。歌詞の一部を示すと「鳥なぜ啼くの／鳥は山に／可愛い七つの子があるからよ／可愛可愛と鳥は啼くの／可愛可愛と啼くんだよ」になっている。ここにでてくる「七つの子」の七つが、七羽なのか、七才なのか、ということが、ときどき議論になるようである。幾つか調べてみると、論点は「カラスは七羽も子を産まない」という意見と「七才にもなれば、もう子ガラスではない」という意見の対立である。このような否定形の意見で議論をしてみても、あまり意味のある答えは出てこず、結局は水掛け論に終わるだけである。別段、どちらでもよいと言えば、どちらでもよいのだが、いま少し肯定的な議論を考えてみる。

「通りゃんせ」というわらべ唄がある。この唄は江戸時代からよく知られているもので、古い信仰の名残りが含まれている。歌詞は「通りゃんせ通りゃんせ／此処は何処の細道じゃ／天神様の細道じゃ／ちいっと通してくだしゅんせ／御用のないもの通しゅせぬ／この子の七つのお祝いに／お札を納めに参ります（以下略）」である。「この子の七つのお祝いに／お札を納めに参ります」とあるが、ここに出てくる「子供の七つのお祝い」というのは、子供が七才になったとき行なう通過儀礼「氏子入り」のことである。

今ではすっかり死語となっているようだが、戦前までは生きていた言葉に「子供七つまでは、神の内」というのがあった。江戸時代以前には、幼児死亡率が高かったので、子供は神様からの預かり者とされており、七才まで育てば、一安心と考えられていた。そこで、七才になると宮参りをする慣習があったが、これは、その子供が神の管理下から、人間社会へと移るための行事であった。鳥に譬えれば、「七つの子」は巣立ち直前のヒナに相当する。

野口雨情の「七つの子」の場合も「七つ」を「子」にかかる形容詞と見ないで、「七つの子」で一つの単語と解釈すれば、素直に巣立ち直前のヒナと理解できる。おそらくはカラスのとっても可愛い盛りの子であろう。なお、カラスの鳴き声をカワイカワイと表現する地方もあるので、「可愛可愛と啼くんだよ」の「可愛」はカラスの鳴き声にもなっていると説く人もいる。

わらべ唄というのは、昔から子供達によって歌い継がれてきた唄で、古いものには、平安時代まで遡れるものもあるそうだ。その管理が基本的に子供に委ねられてきており、意味を理解しないままに、歌い継いできたケースも多いので、間違っただけで伝承したり、それに部分的に手直しが為されたりして、歌詞が意味不明になっているものが沢山ある。それを大人が聞き取って、適当な漢字を当てはめて記録してきたので、とんでもない勘違いが含まれているもある。また現在では東京近辺の唄を中心に整理されてはいるが、本来は全て方言である。

一般には、鳥の名が含まれていないとされている歌詞の

中に、実は鳥名がひそんでいることがある。歌詞全体の意味は非常に難しく、よく判らないが、鳥の名探しゴッコという観点からは、比較的判りやすいのは「かごめかごめ」である。「かごめ」は、その遊び方から推察して、「屈め」の訛ったものとする理解で異論は少ないようである。これをカモメと誤解して、次の「籠の中の鳥は」という歌詞に結びついていったようである。また「鶴と亀とすうべった」という部分にツルが出てくるが、この歌詞はもう一つ以前の形としては「つるつる／つうべった」であつたらしい。これでは意味が判らないので、とりあえず「鶴と亀とすうべった」で誤魔化したような感じである。

もう少し意外なものとして、鬼決めのための指遊び唄である「ずいずいずいころばし」がある。歌詞の冒頭は「ずいずいずいころばし胡麻味噌ずい／茶壺に追われてトッピンシャン／抜けたアらドンドコショ」となっている。この「茶壺」であるが、大抵の本には「お茶壺道中」のこと、となっている。子供が、この行列に追われて逃げる様子を歌ったというのである。「お茶壺道中」というのは、宇治で採れた新茶を茶壺に入れて将軍家に献上するための行列のことで、非常に権威があり、大名行列と出会ったときは、大名が駕籠を降りて待機したと言われている。このような行列では通行人の先払いが行なわれているはずなので、その前で子供達が遊んでいて、行列が来たから慌てて逃げ出すという風景はちょっと考えられない。そんなことより、このような解釈では、歌詞を省略した後半部分と全くつながっていないのである。

江戸時代に書きとめられた唄では「鳥坊に追われて／すっぽんちゃん」となっている。鳥坊というのが何である判らないが、鳥よりも鳥天狗の方が、当たっていきそうな感じである。しかし、案外にカラスである可能性も残されている。こういう場合は、方言バージョンの唄を調べてみると、答えが出ることがある。秋田県に野鳥のことに詳しい武藤鉄城という民俗学者がいた。この人の「鳥の民俗」という本を読んでもみると、この部分が「谷地モウに追われて／トンチンシャン」と記録されている。谷地モウはヨシゴイの秋田県の方言で、谷地ボウともいう。私はヨシゴイの声を聞いたことは無いが、夜中に谷地で気味の悪い声を出して「モウ・モウ・モウ」と鳴くそうだ。またモウ（モウコともいう）というのは、お化けの東北方言であり、谷地モウもお化けの一種ともされる。武藤は解説の中で「谷地モウが来るぞォ、と叫ぶと子供が驚いて逃げる」という意味のことを述べている。ごくごく簡単に考えてみると、子供が追われて逃げるのは、お化けに決まっていそうな気がする。従って、「茶壺」の部分にはお化けか、それに似た言葉が入っていたと考えるのである。お化けを恐がって、物置のかげでじっと身を潜めている子供の姿を思い浮かべれば、この唄のイメージが伝わってくるように思う。

## 鳥好きの文学散歩 6

## 石川啄木『一握の砂』から

札幌市西区 高橋良直

「しらしらと氷かがやき千鳥鳴く

釧路の海の冬の月かな」

歌集『一握の砂』におさめられたこの歌は、釧路市米町公園内の啄木歌碑に刻まれている。この歌に関してはかつて釧路の啄木研究家の間で、ある種の「論争」があったそうである。すなわちある人が、厳冬期の釧路にチドリがいることはないから啄木の観察には誤りがあると指摘し、これに対して、科学的に正確かどうかは第二義的な問題であって、啄木が何かをチドリと取り違えたとしても歌の生命に変わりはないというような反論がなされたということらしい。啄木が見たのがチドリでなかったとしても歌の価値には変わりがないというのはそのとおりにかもしれないが、パードウォッチャーとしては、ではその正体は何であったのか気になる場所である。

このような「論争」があったことを私が知ったのは、故斉藤春雄氏の『北ぐにの鳥』（北海道新聞社、1984年）によってであった。斉藤氏はその中で啄木が見たのはウミスズメだったろうと推察されておられる（同書216頁）。ウミスズメは古くは「うみちどり」とも呼ばれていたそうであり、「チッチッ」というような鳴き声は、チドリのそれに似ているともいえる。これを読んだ時私は、啄木がその声を聞いた場所が釧路港の岸壁であったように想像し、岸壁ならばチドリよりはウミスズメが似つかわしいと納得していた。

その後釧路時代の啄木の日記を読む機会があり、この歌

を詠むきっかけになったと思われる記述があることを知った。明治41年3月17日の夜半、啄木は自宅を訪れた二人の友人を玄関まで見送り、そのまま浜辺まで行ってしまふ。少し長くなるが、日記のその部分を次に引用する。

「二人が帰るといふので、門口まで送ると、戸外には霜かと冴ゆる月の影、ウツカリ下駄をつつかけて出た。心地がよい。誰の発議ともなく、復、此間の晩の濱へ行つた。汐が引いて居て、砂が氷つて居る。海は矢張静かだ。月は明るい。氷れる砂の上を歩いて知人岬の下の方まで行くと、千鳥が啼いた。生れて初めて千鳥を聞いた。千鳥！ 千鳥！ 月影が鳴くのか、千鳥の声が照るのか！ 頻りに鳴く。彼處でも此方でも鳴く。氷れる砂の上に三人の影法師は黒かつた。」

啄木らが歩いた知人岬近くの海岸は、現在は釧路港の区域になっていて当時の面影は残っていないようだが、釧路川の河口に近く、かつては広い砂浜であったようである。ウミスズメは港の岸壁などでは間近に見られることもあるが、砂浜のようなどころでは見られないように思う。岸壁ではなく砂浜のあちこちから声が聞こえてくるという状況を考えると、これはウミスズメではなく、チドリかあるいはシギの仲間と考えるのが自然ではないだろうか。

日本野鳥の会の会誌『野鳥』2002年12月号には「冬の鳥、冬のうた」という特集記事があり、この中で啄木のこの歌が取り上げられている。解説者（歌人佐々木幸綱氏）はこの鳥の種を特定せず、単に「チドリ」としているが、添えられた写真はシロチドリであった。

しかし、最近私は啄木が鳴き声を聞いたのはハマシギだったのではないかと考えるようになった。春国岱や霧多布など道東でハマシギが少数ながら越冬することが知られるようになったのは最近のことだが、これはウォッチャーによる観察例が増えてきたことによるもので、かなり昔からハマシギは道東で越冬していたものと考えてよいのではないか。3月の後半になればシロチドリが渡って来ることもあるようだが、もともと個体数の多い鳥ではないし、比較すればハマシギの可能性がより大きいと思う。ハマシギの鳴き声は「ビュリビュリ」というようないくらか濁ったもので、チドリ類とは違うが、この時代、チドリと小型のシギとは一般に明瞭に区別されてはいなかったようであり、ハマシギとチドリを区別できなかったことは無理もないことだったのであろう。

ところで、啄木はもともと野鳥などに関心を持ったことはないようであり、「生れて初めて千鳥を聞いた」ということである。月が明るい夜だったとはいえ、何かの鳴き声を始めて聞いてそれをすぐに「千鳥」と認識するということができるものなのか、これは私にとって依然として謎である。

（鳥居省三『石川啄木—その釧路時代—』第5版（釧路新書、1993年）を参考にしました。）



啄木歌碑（釧路市米町公園）

## 野鳥とインフルエンザウイルス

北海道医療大学薬学部免疫微生物学講座 教授 岡崎 克則

昨年1月、山口県の養鶏場で国内では79年ぶりに高病原性鳥インフルエンザが発生し、3万羽以上のニワトリが斃死あるいは処分されました。ヘリコプターからの空撮もまじえた報道は、インフルエンザに関する研究で今年度の学士院賞を受賞された北海道大学喜田教授の下で10年以上動物インフルエンザの調査に携わっていた筆者にとっても驚くほど大規模に感じられたものです。病因は、1997年に香港で発生したヒトの集団感染（死亡6例を含む18例）と同じH5N1ウイルスでした。その後、大分県と京都府でも発生があり20万羽以上のニワトリが処分され、カラスへの感染も確認されました。一方、本年6月に茨城県の養鶏場で発見されたH5N2ウイルスでは、産卵数の低下が著しかったものの死亡率に大きな変化はなかったようです。しかしながら、このような弱毒ウイルスがニワトリに蔓延し、強毒ウイルスに変化する可能性があるため全羽が廃棄されました。いずれの場合も野鳥からの感染が疑われていますが、感染源は未だ謎に包まれたままです。

インフルエンザウイルスにはA、B、Cと3つの型があり、自然界でヒト以外の動物が感染するのはA型ウイルスのみです。したがって、ここではA型ウイルスに限って触れることにします。インフルエンザウイルスの遺伝子は8本の分節に分かれ、これらがヘマグルチニン（H）とノイラミニダーゼ（N）という突起の付いた脂質膜で包まれた直径100～200ナノメートル（1ミリの1/10,000～1/5,000）のウイルスです（図1）。2種類の突起には各々H1～H15、N1～N9の型があり、その組み合わせで「H5N1」、「H5N2」、あるいはヒトで毎年のように流行している「H3N2」ウイルス、というように分類されます。これまでヒトでの流行はH1N1、H2N2、H3N2の3種類に限られていますが、鳥類からは様々な型のウイルスが分離されています。特に、渡りガモからは高い確率でウイルスが分離され（筆者の経験では100コ以上のウンチを調べて40%にも及ぶことがありました）、しかもそれらにはH

1～H15、N1～N9すべてが揃っています。このことから、インフルエンザウイルスの本来の宿主はカモであると考えられ、近年の遺伝子解析の成績はこの仮説を支持しています。カモのインフルエンザは、1)ウイルスは腸管で増殖して糞とともに大量に排泄される、2)糞を含んだ水を飲み込むことによって感染が成立する、3)全く症状を示さない、4)渡りによってウイルスが地球規模で運搬される、等の特徴があります。

さて、話題を高病原性鳥インフルエンザに戻しましょう。最初に分離された高病原性ウイルスはH7N7型で、ヒトのインフルエンザウイルスが初めて分離されるのに先立つこと31年、1902年のことです。その後、H7N7あるいはH7N1ウイルスによる高病原性鳥インフルエンザが世界各地のニワトリやシチメンチョウの間で流行しています。2003年にはオランダの獣医師がH7N7高病原性ウイルスに感染して亡くなりました。一方、H5型ウイルスによる高病原性鳥インフルエンザは1959年にスコットランドのニワトリで初めて報告されました。病因はH5N1ウイルスでした。また、1961年には南アフリカの喜望峰で大量死したアジサシからH5N3ウイルスが分離されました。このウイルスは野鳥から分離された最初のインフルエンザウイルスであり、ニワトリに対しても非常に強い病原性を示します。1983～84年と90年代半ばには各々米国とメキシコでH5N2ウイルスによる高病原性鳥インフルエンザが発生し、大きな被害をもたらしました。1997年には香港のニワトリで流行していたH5N1ウイルスがヒトに感染するという事件が発生し、さらに、2003年12月以降、H5N1ウイルスによる高病原性鳥インフルエンザが韓国、ベトナム、日本、タイ、カンボジア、中国、ラオス、インドネシア、フィリピンで大流行しています。これらのうち、ベトナム、タイ、カンボジアの3国では108人にH5N1ウイルスの感染が確認され、54人が亡くなっています（6月28日現在）。このように、高病原性鳥インフルエンザはH5およびH7型ウイルスによってのみ惹き起こされます。しかし、すべてのH5、H7型ウイルスが強い病原性を示す訳ではありません。15種類のヘマグルチニンの中で、H5とH7型に分類されるものの、さらにそのごく一部が特殊な構造をしていて、その特殊なヘマグルチニンを持つウイルスのみがニワトリやシチメンチョウの全身の臓器で増殖します。このようなウイルスが高病原性鳥インフルエンザウイルスといわれるものなのです。

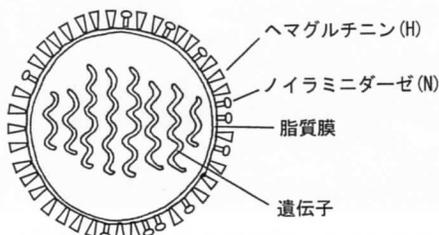


図1 インフルエンザウイルス

それでは、高病原性鳥インフルエンザウイルスに感染したカモはどうなるのでしょうか？少なくとも昨年山口県でニワトリから分離されたウイルスまでは、たとえ全身でウイルスが増えても症状を示すことはありませんでした。ところが、本年4月から5月にかけて中国の青海湖で高病原性H5N1ウイルスによるガンの大量死が起きました。カモ同様、インフルエンザウイルスに感染したガンは何ら症状を示すことはないはずだったのです。得られたウイルスの遺伝子を解析したところ、もともとガチョウから分離されていたH5N1ウイルスとニワトリの高病原性H5N1ウイルスとの「合の子」であることがわかりました。インフルエンザウイルスはその遺伝子が分節に分かれているため、複数のウイルスが一つの細胞に感染した場合、容易に「合の子」ウイルスが出現するのです。青海湖は中国のほぼ中央に位置し、シベリア、オセアニア、東南アジアなど世界各地の渡り鳥の一大繁殖地として知られており、高病原性ウイルスの拡散が危惧されています。

H5N1インフルエンザウイルス感染による死者は60人を超えましたが、幸いヒトからヒトへの伝搬は起きていないようです。しかし、H5N1ウイルスに感染したヒトの体内でヒトのインフルエンザウイルスとの「合の子」がで

きた場合、あるいは小規模でもヒトの間で感染が繰り返された場合、世界的な大流行を惹き起こす新型ウイルスが出現する確率は決して低いものではありません。今日、インフルエンザウイルスの突起のひとつであるノイラミニダーゼに作用してウイルスの増殖を抑える特効薬（タミフル）が開発され、2009年までに2,500万人分を確保する計画が進められています。また、ワクチンのもととなるウイルスの選定も始められており、遅まきながら新型ウイルス出現に対する備えが整えられつつあります。

意外なことにカモの糞便から分離されるウイルスの多くはニワトリにすら感染しません。ですから元気に飛んでいるカモからヒトへ直接ウイルスが伝搬する心配は、まずありません。ただし、野生に限らず動物に触れた際には必ず石鹸で手洗いをするよう務めましょう。インフルエンザウイルスを始め多くのウイルスは脂質膜で包まれているため、石鹸で容易に殺すことができます。また、その他の病原体も洗い流してしまえば体内に取り込まれる可能性はなくなります。現在、北海道環境科学センターを中心に野生鳥類の病原体に関する調査を実施しています。死んだ野鳥を見つけた際には酪農学園大学獣医学部の浅川先生にご連絡戴けると幸いです。

— 新聞情報から —

天売島でコウテンシ国内初確認

北海道新聞2005年7月19日朝刊第1面（全道版）に、留萌管内羽幌町の天売島で5月4日にコウテンシ（学名 *Melanocorypha mongolica*、英名Mongolian Lark）が確認されていたことが報道されました。複数の人たちにより観察・写真撮影されたのですが、掲載された写真は愛護会会員の安真一郎さんが撮影したものでした。

コウテンシはヒバリ科の鳥で、シベリア南西部、モンゴル、中国北部の草原などに分布しており、これが日本国内で初めての確認例です。漢字では「告天子」で、鳴き声がよいところから中国人が飼い鳥として愛玩するといわれています。「コウテンシ」といわれる鳥でこれまで日本で記録があるのは、クビワコウテンシとヒメコウテンシの2種ですが、分類学的にコウテンシはクビワコウテンシと同じ属に含まれ、ヒメコウテンシとは属を異にします。

このコウテンシについては、天売島・焼尻島でのバードウィークにちなむ行事などを紹介した北海道新聞2005年5月11日の朝刊地方版で少し触れられています。その時点では「コウテンシとみられる鳥」という表現になっており、確定には至っていませんでしたが、その後、6月下旬に、山階鳥類研究所によりコウテンシであると

の確定判断がなされたそうです。

現段階では、新聞報道および天売島関係のホームページ (<http://www.teuri.jp/>) で公表されているだけですが、将来的に学術誌などに報告し、掲載されたならば、日本の鳥として正式に認められることになるとみなされます。

なお、安さんが同日に撮影した写真（新聞報道とは別の写真です）を参考までに掲載します。

文責 広報部



コウテンシ 2005年5月4日 天売島



鶴川探鳥会 感想

2005. 5. 22

苫小牧市 鷺田 善幸

比較的暖かく、天気も良い日でした。天気が良いとあまり鳥が出ないというジンクス(?)通り、シギ、チドリ類は、イソシギ、シロチドリ、トウネンの3種だけでした。

人工干潟は良さそうな環境になっていましたが、シギ、チドリ類にはついていませんでした。

探鳥会が終わり、午後、ネイチャーinむかわの小山内さんの案内により、鶴川漁港近くの海岸でキョウジョシギの20羽位の群れをみることができました。

以前、鶴川右岸の草むらに50羽以上のムナグロがいたり、海岸でツバメチドリが見られたのはもう20年も前の探鳥会のことです。また、千歳川でアカショウビンが見られなくなり、ウトナイのシマアオジも大変少なくなってしまいました。探鳥地で以前は見られた鳥が見られなくなるのは、古い会員が鬼籍に入られると同じように寂しいものです。

【記録された鳥】オオハム、ウミウ、アオサギ、トビ、チュウヒ、ヒドリガモ、ヨシガモ、コガモ、マガモ、カワアイサ、シロチドリ、イソシギ、トウネン、オオセグロカモメ、ユリカモメ、ヒバリ、ハクセキレイ、ノゴマ、ノビタキ、コヨシキリ、オオジュリン、カワラヒワ、スズメ、ムクドリ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、ドバト

以上 27種

【参加者】赤沼礼子、石田典也、板田孝弘、岩崎孝博、内田 孝、荻野裕子、小山内恵子、梶本兼吉、木村孝行、木村真由美、こうたろう、小林、小堀煌治、品川睦生、島田芳郎・陽子、高橋良直、竹内 強、竹内ゆきみ、田中哲郎、田中洋子、遠山あづさ、戸津高保、中正憲・弘子、成澤里美、早坂泰夫、早坂みどり、原 芳明、樋口孝城、藤谷節子、堀 さち子、松原寛直・敏子、村上トヨ、山下 茂、山下葉奈、山口和夫、山田千代、山田小揺、山本昌子、鷺田善幸

以上 42名

【担当幹事】成澤里美、樋口孝城

東大演習林白金温泉付近  
宿泊探鳥会に参加して

2005. 6. 4~5 札幌市西区 渡辺 栄子

4月に入会させていただきました新人です。早速にバスによる探鳥会に参加することになり、大いに楽しみに胸をふくらませておりました。4日早朝、始発の地下鉄に乗り

集合場所へ。小雨が降り天候が心配。6時45分、さあ一出発。演習林に着く頃には雨も上り、有沢先生と合流し、演習林の概要などの説明を受け、森の中へ。こんな広大な森が残っているのに感激しながら歩いているとあちこちで鳥の声が聞こえる。この声を聞いただけで皆様は主が解るらしい。なんてすごいだろう！ベテランさんばかりですね。所々に熊のふんもあり内心ヒヤヒヤもの。森の中で昼食中にクマゲラが出現！食事もそこそこに夢中で姿を追う。私もやっとスコープを覗かせてもらい確認できた。食事後は望岳台へ。雪におおわれた十勝の山々に圧倒される。残雪の上を歩きホシガラスを捜すが残念ながら姿はみえない。雨が落ちてきた。お腹もすいてきた。今日の宿“白金観光ホテル”へ。夕食時の有沢先生のクマゲラの一生、特に子育てについては感慨深いものがあった。翌朝5時よりキャンプ場へ、雨上りの気持ち良い月。コルリが盛んにさえずっている。クマゲラが行く手を横ぎっていった。次第に青空になり美瑛岳の全容が姿をみせてくれた。なんと素晴らしい



有沢先生から説明を受ける

自然だろう！幸せを感じた一時であった。朝食後は野鳥の森へ。山道を歩く気分である。鳥の声があちこちから聞こえるが私にはその主が解らない。でも皆さんには解るらしい。高い樹の天辺にカッコウがいた。チゴハヤブサもいた。これ位しか私にはわからない。クマゲラの巣がオシドリに乗とられた場所に案内してもらう。意外と人間の生活圏の近くに巣があるのに驚く。オシドリがあんな木の上で子育てをするなんてびっくりでした。クマゲラはお人好しの所もあるんですね。昼食後有沢先生とお別れし美瑛の丘をまわり帰途に着く。ここはまだ花々の色彩はなく丘陵にきれいな曲線を描く畑の畝が美しかった。

今回始めてバスツアー探鳥会に参加させていただき皆様の耳の良さ、目の確かさには感銘したしだいです。いつの日か私も声を聞いて主を判別できるようになりたいものです。幹事の皆様、こまかい気配りと、ユーモアで楽しませていただきありがとうございました。広大な美しい自然の

中に身を置き幸せな2日間でした。

【記録された鳥】

① 東大演習林(6月4日)

エゾライチョウ、キジバト、ツツドリ、コゲラ、アカゲラ、クマゲラ、ヒバリ、キセキレイ、コマドリ、コルリ、ルリビタキ、ノビタキ、トラツグミ、クロツグミ、アカハラ、ヤブサメ、ウグイス、センダイムシクイ、キビタキ、オオルリ、エナガ、ハシブトガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ヤマガラ、ゴジュウカラ、キバシリ、アオジ、イスカ、イカル、シメ、ニュウナイスズメ、カケス、ハシボソガラス、ハシブトガラス 以上 35種

② 望岳台(6月4日)

キジバト、ツツドリ、ルリビタキ、ウグイス、ヒガラ、アオジ、ウソ、ギンザンマシコ 以上 8種

③ 白金野営場(6月5日)

トビ、チゴハヤブサ、キジバト、コゲラ、アカゲラ、クマゲラ、ヤマゲラ、イワツバメ、キセキレイ、ハクセキレイ、ミソサザイ、コルリ、ルリビタキ、クロツグミ、アカハラ、ヤブサメ、ウグイス、エゾムシクイ、センダイムシクイ、キビタキ、コサメビタキ、ハシブトガラ、コガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ヤマガラ、ゴジュウカラ、キバシリ、アオジ、クロジ、ニュウナイスズメ、ハシブトガラス 以上 32種

④ 白金野鳥の森(6月5日)

トビ、オシドリ、キジバト、ツツドリ、コゲラ、オオアカゲラ、アカゲラ、クマゲラ、ヤマゲラ、ビンズイ、ミソ

サザイ、コルリ、ルリビタキ、クロツグミ、アカハラ、ヤブサメ、ウグイス、エゾムシクイ、センダイムシクイ、キビタキ、オオルリ、コサメビタキ、ハシブトガラス、ヒガラ、シジュウカラ、ヤマガラ、ゴジュウカラ、キバシリ、ホオジロ、アオジ、クロジ、ウソ、ニュウナイスズメ、ハシボソガラス 以上 34種

【参加者】赤沼礼子、池田みちえ、石橋和子、岩崎孝博、石井幸子、氏家正毅、荻野裕子、板田孝弘、白澤昌彦、岡田幹夫、片山 実・慶子、亀田 努・節子、蒲澤鉄太郎、川東保憲・知子、栗林宏三、小堀煌治、佐藤典子、志田博明・征子、品川睦生、島田芳郎・陽子、清水朋子、白鳥恵子、高栗 勇、田中志司子、道場 優・信子、徳田恵美、徳田和美、戸津高保、中嶋慶子、長尾由美子、中正憲信・弘子、西川喜久代、橋爪陽子、原 美保、堀 さち子、松原寛直・敏子、三浦美重子、村田静穂、安 真一郎、山口和夫、山田登志恵、山田良造、山本昌子、横山加奈子、渡辺栄子 以上 53名

【現地ガイド】有沢 浩

【担当幹事】蒲澤鉄太郎、戸津高保、清水朋子、栗林宏三、道場 優

平和の滝「夜の探鳥会」

2005. 6. 11 札幌市白石区 村上 トヨ

友人の車に同乗させて頂く事が出来て今回、初めて平和の滝の夜の探鳥会に参加させていただきました。



参加者全員の集合写真

季節も丁度よく滝の水が豊富で豪快な音を聞きながら駐車場の集合場所に行きました。ヤブサメの遠慮がただけれど自分をしっかり主張する声、美声の持ち主のクロツグミや私の大好きなキビタキが良く通る美声を聞かせてくれました。沢山の参加者と目的地へ行く間もコルリやカラ類等が居て目的地迄約40分程かかりました。マガモが静かに草地で休んでいました。道々には野草も沢山咲いていて珍しい「ナンブ草」の群生もあり嬉しい出会いでした。大きい緑色の三枚葉と質素な真白い花は今が盛りでした。

目的地に着いた時に、やっと暗くなりはじめました。腰を降ろす間もなく、ベテランの方が「マミジロの声がする」との事、耳を澄ますと初めて聞く良く通る声でした。そのうち「向かいの、こんもりとした木の上に居るよ」との声が上がり必死で場所を教えてくださいました。居ました!!確かに少しコロツとしたシルエットを、しっかり見る事が出来ました。今夜初めての出会いでした。美声と共に、お目にかかれて感動しました。図鑑に出ていた黒い身体と真白い立派な美眉をまざまざと思い浮かべる事が出来ました。大満足でした。あつと言う間に時間となり下山しましたが思い出深い夜の探鳥会でした。幹事の皆様や沢山の参加者の方々、今夜は御苦勞様でした。そしてありがとうございました。良い思い出が一つ増えました。

【記録された鳥】 マガモ、ジュウイチ、ヒヨドリ、コルリ、マミジロ、クロツグミ、ヤブサメ、ウグイス、キビタキ、アオジ、ハシブトガラス 以上 11種

【参加者】 岩崎孝博、大野信明、岡田幹夫、かずたまゆみ・なおゆき・はるな、木口綾乃、木口わたる、小西峰夫・美美枝、島田芳郎・陽子、戸津高保・以知子、武沢和義・佐知子、半澤綾華、樋口孝城、松山健志・遼太郎、村上トヨ 以上 21名

【担当幹事】 岩崎孝博、岡田幹夫

## 天の配剤、雨でも吉 植苗ウトナイ探鳥会

2005. 6. 12 上川郡当麻町 大島 武

余り虫のい、ことばかりは続くまい、まして悪いことも、天の配剤? 宜しきを得たり、といったことの顛末を述べてみましょう。

停年退職後の私は土、日曜に勤めを持っているのですが、何んの拍子か6月12日の日曜がぽっかり空きました。タイミングよく野鳥愛護会の植苗ウトナイ湖探鳥会が開催されるとか、そこでJR調べで旭川を朝6時20分の特急に乗れば、札幌発7時54分の千歳線で植苗駅に9時(集合9時10分)に到着出来ることが判明しました。こんな嬉しいこと

はありません。その日を待つこと2週間、この時点で北海道は一気に春めいて連日の晴天です。が(好事魔多しか)いよいよ当日は夜半から雨で、朝はますます激しくなる変わりようです。(エイ、ままよ)と車中の人となったのですが、沈み勝ちな胸内を一時欣喜させたのは札幌近くから青空が見え始め、薄陽すら差し始めたことです。(ああ、天は余を見捨てなかった)と微笑んだのですが、その思い上がった横面をはたかれたように千歳近くで雨は窓を叩いて、湖に近づくにしたがって一段と荒れ始めたことは、参加者の皆様ご存じの通りです。

さて、近年の4年間の例をとっても3回が雨、今回で4回目とか、そんな幹事さんのユーモラスな挨拶のあと、旧知の蒲澤様から(新参加の人)と紹介された私は、この多くの猛者連に何かじっくり溶け入れられそうな熱い気脈を感じるのでした。

駅前から伸びた自動車道路のガードレール内を進む探鳥第一歩は味気なく、センダイムシクイにキビタキのぐずり、他にヒガラ、シジュウカラで、左折して林道に入っても雨のせいか鳥影薄し……。となると道端の美しいベニバナイチヤクソウなどの花々に衆目の注がれるのは人情、勢いこの筋の大家が忙しくなるのはどの探鳥会でも見られて、和やか味合い深い一興には違いありません。

しかし、枯れ穂のホザキシモツケの群生(花の時どんなにか壮観でしょう)、そのなかで孤影を落すハンノキ、今を盛りのエゾノコリンゴの白花が遠く的林縁を彩る開けた草原に出ると、身辺をとりまく空気は一変します。例のけたたましいココシキリ(この日は気弱わか)が気運を盛りあげ、相次いでノビタキ、ベニマシコが出ます。目を凝らすとオオジュリンも場所を変え衣装をひっかえて行き交う。判断よく(あの羽色は雌ね)と女性軍が囁き合う。耳をそばだてるとシマセンニュウのチリチリとか、シーシーと虫声にも似たマキノセンニュウも聞きだせることができます。

やがて美々川が見えてくる。名にし負うこの美しい川は、心よい川幅と水辺の曲線の美しさにありと見た私ですが、水深は意外に深いですよと云われながら楚々として流れはウトナイ湖に注ぐ。人影に飛び立つアオサギがゆっくり湖面を去る。スコープに大映しされたカッコウにツツドリの声がかすかに重なって続きます。さらに、ちよっと聞かれたノゴマ、クロツグミの声。嫌な雨、しかし心む静かな、静かなピアノシモの世界です。時折、天空で演じられるオオジギのディスプレイも、重い雨空に響かぬモノクロのトーンですが、何故か多くの人が釘づけにされます。出発から12時の鳥合わせまでの大半の時は優にこの草原で費やされました。一昨年までは必ず見られたというシマアオジ

にも夢再びといった風情も残す見事な舞台です。数にこだわるのはナンセンスでしょうが、この日の鳥合わせは昨年(晴れ)と同数とか。そして私が、朝千歳線の上野幌を出て間もなく右手、線路下の錦鯉の生産、販売を行う池で、池端から水面をうかがうゴイサギ一羽を車窓から見たのを加えると、私には“吉”となる訳です。

〔追記〕帰路、蒲澤様のご好意でウトナイ湖野生鳥獣保護センターに立ち寄り、多くの事を見聞出来たことを新たに深謝します。

【記録された鳥】アオサギ、トビ、マガモ、オオジシギ、キジバト、カッコウ、ツツドリ、コゲラ、ショウドウツバメ、ヒヨドリ、モズ、ノゴマ、ノビタキ、クロツグミ、アカハラ、ウグイス、シマセンニュウ、マキノセンニュウ、コヨシキリ、メボソムシクイ、センダイムシクイ、キビタキ、ハシブトガラ、ヒガラ、シジュウカラ、アオジ、オオジュリン、カワラヒワ、ベニマシコ、イカル、ニュウナイスズメ、スズメ、コムドリ、ムクドリ、ハシブトガラス、ドバト

以上 36種

【参加者】今村三枝子、岩崎孝博、大島 武、片山 實・慶子、蒲澤鉄太郎、川村宣子、小山久一、品川睦生、島田芳郎・陽子、高橋利道、高橋良直、竹内 強、戸津高保、中正憲信・弘子、樋口孝城、平野規子、広木朋子、松原寛直・敏子、安 真一郎、山口和夫、山本昌子

以上 25名  
【担当幹事】竹内 強、樋口孝城

### カッコウの声と共に歩く 東米里探鳥会

2005. 6. 19 札幌市白石区 三浦 優子

6月に入り窓を開けると林から野鳥のすがすがしい声ばかり聞こえてきます。

毎年の探鳥会でこの東米里で見た野鳥の一覧を見せてもらいその多さにびっくりしていました。実際に参加して始めて見る鳥に、そしてその行動に感激しました。

探鳥会の皆さんが確認した野鳥の数は27種類で、私は17種類しか確認することはできませんでした。参加した皆さんは鳴き声で鳥の名前がわかり、すぐ望遠鏡で見つけます。私は望遠鏡で見せてもらってから自分の望遠鏡で探します。鳴き声と共に望遠鏡で姿を見ることができ、今までは写真や本でしか見たことのないのが目の前に見えるのです。

カッコウの姿や幼鳥に餌を運ぶ親鳥の忙しく飛び回る姿や幼鳥の声、幼鳥を連れて飛ぶ親子のカワラヒワなど車で通るいつもの道で、歩いて見ることにより、たくさんの野鳥との出会いがうれしかったです。歩くことのよさの再発見でもありました。

6月6日(月)NHKの地球・ふしぎ大自然「小さな狩人モズ」を見たばかりで、そのモズが身近に見ることができたのも大きな感動でした。今度は枝に刺した獲物を見つけようと思いました。

東米里も道路が広くよくなり、開発が進みいろいろな会社の事務所や倉庫、駐車場が出来て、鳥たちの好きな草原が少なくなっているのも実感しました。野鳥のためには「開発よ止まれ!」と叫びたい気持ちでした。

【記録された鳥】アオサギ、トビ、マガモ、キジバト、カッコウ、アマツバメ、アリスイ、アカゲラ、ヒバリ、ハクセキレイ、ヒヨドリ、モズ、ノビタキ、アカハラ、エゾセンニュウ、シマセンニュウ、コヨシキリ、オオヨシキリ、ホオアカ、アオジ、オオジュリン、カワラヒワ、スズメ、コムドリ、ムクドリ、ハシボソガラス、ハシブトガラス

以上 27種

【参加者】石田典也、井上公雄、今村三枝子、岩崎孝博、岡田幹夫、蒲澤鉄太郎、栗林宏三、小堀煌治、高橋利道、道場 優・信子、戸津高保・以知子、橋爪陽子、樋口孝城、三浦優子、安 真一郎、松原寛直・敏子、横山加奈子

以上 20名

【担当幹事】栗林宏三、戸津高保

### 野幌森林公園探鳥会

2005. 6. 26

【記録された鳥】アオサギ、トビ、キジバト、カッコウ、ツツドリ、フクロウ、オオアカゲラ、アカゲラ、ヒヨドリ、ミソサザイ、クロツグミ、ヤブサメ、ウグイス、センダイムシクイ、キビタキ、オオルリ、ハシブトガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ヤマガラ、ゴジュウカラ、アオジ、イカル、ニュウナイスズメ、カケス、ハシブトガラス

以上 26種

【参加者】青山洋子、赤沼礼子、阿部まみ、井上公雄、今井 登、岡田幹夫、尾崎 脩、蒲澤鉄太郎、川村宣子、小泉三雄、小西美美枝、小山久一、斉藤正雄、酒谷洋子、沢田、品川睦生、高橋利道、田中志司子、田中雅子・皇丞・洋、千葉久子、辻田捷紀、戸津高保、中正憲信・弘子、成澤里美、畑 正輔、早坂泰夫、原 芳明、堀 さち子、松原寛直・敏子、森下憲治、山口和夫

以上 35名

【担当幹事】早坂泰夫、山口和夫

### 福移探鳥会

2005. 7. 3 札幌市北区 高田 征男

今日は福移探鳥会の日だ。朝陽が眩しいほどに窓辺に差し込んでいた。福移地区へは足を運んだ事がなくチョット

不安だ。地図を見て大体はわかったつもりだがやはり迷ってしまった。始めて来る所のバス停はわかりづらい。二回目のトライ?でやはりこの付近だと思いつつ、キョロキョロしていたら道端に挙動不審の男が居た(失礼)。一応聞いてみようと思いつたら、向こうから探鳥会に参加される方ですかと声をかけられホットした。道を案内されて進んで行く。狭い道路だなあ~と思いつつ歩いていたら人だかりが見えた。格好からして探鳥会の方々だ。やっと着いた。時間はギリギリだ。いつもこうだ。余裕がほしい。札幌に住んで45年目なのに地理にうといな~と、なさけなくなる時がある。

この一帯は農家が点在しているだけだ。牛と羊が放牧されていれば牧歌的な絵になるのが見当らない。牧草ロールの点在している脇道を鳥の囀りを聞きながら探鳥する。道路だと思って歩いているところは堤防の上でした。

鳥達が出迎えてくれる。ヒバリ、ショウドウツバメ、ハクセキレイ、ノビタキ、キビタキ、けっこう楽しめそう。天候が良かったので眺望も楽しめた。JR学園都市線の石狩川鉄橋、太美温泉のビル、あいの里の高層マンション、南の方ではJRタワーがやはり高い。河川敷はラジコンヘリの競技会も行っていた。やがて川面が見えてきた。石狩川と豊平川の合流地だと云う。始めて見る場所で川の色が違うようだ。今日は雄々と流れている感じだがひとたび大雨が降れば川は荒れる。豊平川は静かに静かに流れていた母なる石狩川と再会できたかのように、中州にアオサギがいつもの姿勢で水辺を見つめていた。石狩川の対岸の近くをチュウヒが独特の高さを飛んでいた。皆さん鳥をみつけるのが早い。やっと捜したと思ったら飛び去る。鳥も回りに外敵もいるし、子育てに忙しいのだろう。野鳥愛護会に加入させて戴いてまだ数ヶ月ですがこれからも各地の探鳥会に参加させていただきます。初心者ですので今後共御指導の程よろしく願い致します。プロミナーを見せて下さいました方、ありがとうございました。今日は楽しい探鳥会でした。次回を楽しみにしています。

【記録された鳥】アオサギ、トビ、チュウヒ、キジバト、カッコウ、アリスイ、アカゲラ、ヒバリ、ショウドウツバメ、ハクセキレイ、ヒヨドリ、モズ、ノゴマ、キビタキ、ウグイス、エゾセンニュウ、シマセンニュウ、コヨシキリ、オオヨシキリ、キビタキ、ハシブトガラ、ホオアカ、アオジ、オオジュリン、カワラヒワ、ベニマシコ、ニュウナイスズメ、スズメ、コムクドリ、ムクドリ、ハシボソガラス、ハシブトガラス 以上 32種

【参加者】赤沼礼子、阿部 耐、阿部真美、五十嵐優幸、板田孝弘、井上公雄、今村三枝子、岩崎孝博、岡田幹夫、加藤千春、蒲澤鉄太郎、栗林宏三、小堀煌治、斎藤昌子、

品川睦生、清水朋子、島田芳郎・陽子、白澤昌彦、高栗勇、高田征男、高橋利道、高橋良直、田中志司子、田中雅子・洋、徳田恵美、徳田和美、中正憲信・弘子、中田勝義、浜田 強、原 美保、樋口孝城、広川淳子、松原寛直・敏子、三浦とも子、安 真一郎、柳川、山口和夫、山本和昭、山田良造 以上 41名

【担当幹事】岩崎孝博、栗林宏三

## 野幌森林公園探鳥会

2005. 7.10

【記録された鳥】キジバト、カッコウ、ツツドリ、コゲラ、オオアカゲラ、アカゲラ、クマガラ、ヒヨドリ、クロツグミ、ヤブサメ、ウグイス、センダイムシクイ、キクイタダキ、キビタキ、オオルリ、エナガ、ハシブトガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ヤマガラ、ゴジュウカラ、アオジ、カワラヒワ、イカル、ニュウナイスズメ、ムクドリ、ハシブトガラス 以上 27種

【参加者】岩崎孝博、岡田幹夫、川村宣子、香川 稔、栗林宏三、後藤義民、小山久一、島田芳郎・陽子、高田征男、高橋利道、戸津高保、中田勝義、成澤里美、堀 さち子、松原寛直、安 真一郎、山口和夫、山田良造、横山加奈子、吉田慶子 以上 20名

【担当幹事】成澤里美、栗林宏三

## 鶴川探鳥会

2005. 8.21

大雨と大雨注意報等のため、探鳥会は中止となった。

【参加者】赤沼礼子、板田孝弘、岡田幹夫、小川秀子、荻野裕子、小山内恵子、門村徳男、亀井厚子、後藤義民、小西美美枝、小堀煌治、佐藤ひろみ、佐藤幸典、島田芳郎・陽子、品川睦生、樋口孝城、松原寛直・敏子、安 真一郎、山口和夫、山田としえ、山田良造 以上 23名

【担当幹事】佐藤ひろみ、佐藤幸典

【中止後の懇談】当日は大雨にも関わらず多数の参加者が集合したが探鳥会は中止とされた。担当幹事の提案により鶴川四季の里フロアーにおいて懇談することになった。懇談の中でネイチャー研究会inむかわの調査報告等「干潟再生をめざして鶴川人工干潟報告会の記録」及び「森、里、川、海をつなぐ自然再生」(中央法規社発行)の中での鶴川人工干潟の事例について、会員でもあり同会の小山内恵子さんからの紹介と同じ同会の門村徳男さんから過去2年間における鶴川河口の月別確認鳥類のリストの配布と現況説明等をうけ、約1.5時間の有意義な懇談を終了し散会した。



【野幌森林公園】

2005年10月2日(日)、10月16日(日)

11月6日(日)、12月4日(日)

初秋から晩秋にかけての探鳥会が続きます。陽光に照らされて、紅葉が赤や黄色に輝き始めると、夏鳥たちの姿もほとんど見られなくなり、カラ類やキツツキ類などの留鳥主体の観察になります。晩秋の頃から木々の葉も少なくなり、鳥が見やすくなります。そして留鳥を主体にツグミ、マヒワなどの冬鳥が見られる季節に入ります。

集合＝大沢口駐車場入り口 午前9時  
交通＝新札幌駅バスターミナル発  
夕鉄バス(文京通西行)大沢口入り口下車  
JRバス(文京台循環線)文京台南町下車  
各徒歩5分

【宮島沼】 2005年10月9日(日)

春は北へ秋は南へ、マガンの渡りは、この宮島沼を中継地として繰り返されています。ユーラシア大陸の北東地帯で繁殖を終えて夏を過ごし、9月下旬頃から渡来が始まり、この時期にピークに達します。秋は中継地での滞在期間が短く、休憩をとると順次、越冬地を目指して飛び立っていきますので、春ほどの大群にはなりません、それでもピークには2～3万羽になります。他にハクチョウ、カイツブリ、カモ類やオオタカ、ハヤブサなどの猛禽類、時にはオグロシギ、ツルシギ、トウネンなどのシギ・チドリ類が観察されることもあります。

集合＝大富会館うら湖畔側 午前10時  
交通＝岩見沢駅前バスターミナル発「中央バス月形行」  
大富農協前下車 徒歩約10分

【ウトナイ湖】 2005年11月13日(日)

冬の到来が間近、空気が冷たく澄み渡り、ウトナイの独特な雰囲気が感じられる季節の探鳥会です。岸辺に集まるハクチョウやオナガガモ、湖面を泳ぐヒドリガモ、ヨシガモ、ミコアイサ、カワアイサ、遠くの岸に群れるマガンやヒシクイ、またオジロワシ、オオタカ、ハヤブサなどもよく見かけられます。寒い季節なので防寒には十分に気をつけて参加しましょう。

集合＝鳥獣保護センター駐車場前 午前9時30分  
交通＝道南バス、ウトナイレイクランド下車

# 鳥民だより

【新しく会員になられた方】

- 安 真一郎 札幌市西区
- 渡辺 栄子 札幌市西区
- 高田 征男 札幌市北区
- 石井 道規 札幌市豊平区
- 数田 真弓 札幌市北区
- 外山 知子 札幌市西区
- 種川 ユリ 札幌市豊平区
- 元谷千鶴子 札幌市豊平区

●個人会員→家族会員

- 亀田 勉(新規)・節子(現会員) 石狩郡当別町

●家族会員→個人会員

- 竹中 悦子 札幌市北区
- 岸谷美恵子 樺戸郡新十津川町

◆ 野鳥のカレンダーの販売 ◆

今年も「北海道野鳥愛護会」の名前の入ったカレンダーを販売いたします。印刷予定部数は70部で価格は1部1,200円です。早めにお申し込みください。

お渡しは11月のウトナイ湖と12月の野幌探鳥会になりますので必ずお受け取りください。申し込み時に受け取り場所もお知らせください。

- 申し込み先 戸津 831-8636 (FAXも同じ)
- 小堀 591-2836 (FAXも同じ)

◆ 会員募集 ◆

北海道野鳥愛護会の新規会員を募集しています。申し込みは、探鳥会の際に担当幹事が受け付けます。また、電話による申し込みも受け付けております。なお、会員には個人会員と家族会員があります。

- 電話申し込み先 戸津 831-8636 (FAXも同じ)、
- 小堀 591-2836 (FAXも同じ)

◆ 「野鳥だより」原稿募集 ◆

機関紙「野鳥だより」の原稿を募集しています。内容は、各自が普段探鳥している場所の紹介、珍しい鳥の観察記録、野鳥保護についての意見、随筆等、野鳥に関するものならば何でも結構です。原稿の長さについての規定はありませんが、「野鳥だより」を参照の上、適宜ご判断下さい。写真の添付は可能です。

- 問い合わせ先 樋口 771-4470
- 原稿送り先 北区拓北5条2丁目10-17 樋口孝城

〔北海道野鳥愛護会〕 年会費 個人2,000円、家族3,000円(会計年度4月より) 郵便振替 02710-5-18287  
〒060-0003 札幌市中央区北3条西11丁目加森ビル5・6階 北海道自然保護協会気付 ☎(011)251-5465  
HPのアドレス <http://homepage2.nifty.com/aigokai/>